

文献紹介 「フランスの図書館情報学—展望1983—」 in The Journal of Library History, vol.19, no.1, winter 1984, より

寺田 光孝 (図書館情報大学)

Journal of Library History 誌上で標記の特集号が組まれたのは、親仏家の2人の編集委員 W.V. ジャクソンとB.フランクリンが、1981年、偶々パリで邂逅したという偶然による。フランスの図書館学について語り合ううち、フランス図書館情報学の現況に関する基本的な英語文献がないことに話が及んだというのが特集を組むに至った経緯のようである。

フランスの図書館事情について英語文献が全くない訳では勿論ないし、学位論文等でフランスを扱う例も散見せられる。しかし全体としてみれば文献の数も少なく扱う人も少数派である。フランスの図書館界は、その歴史的蓄積では目を見張らすものを持っている。現状にすくなくならず遅れがあるとしてもポンピドー・センターの公共情報図書館(BPI)のように斬新な試みもみられる。資料の保存対策や図書館の機械化といった共通の課題も少なくない。比較図書館学の視点に立てば興味をそそる事象が少なくないに違いないが、そこには距離がみられる。図書館の歴史的形成には歴然たる相違があるが、それ以上の肌合の違いがあるということであろうか。

ともあれ、フランスの図書館事情を一望のもとに展望する基本的な英語文献がないということから本誌の特集号は出発している。その意味では時宜を得た企画であり、画期的な出来事である。歴史的視点を踏まえ、若干の将来への展望をも示しつつ英語圏の国民にフランス図書館の現況を概説する。これがこの特集号の編集方針である。執筆者はいずれもフランスの専門家である。本誌を読む人には諄々として現況が伝わってくる。この狙いは成功していると言えよう。しかし、それゆえにまた同時に制約をも負わされている。この特集がもともと紹介的なものであり、執筆者がすべてフランス人であるため、読者はここに批判的論調とか論争的或いは論究的な内容を期待しても的はずれに終わる。あくまで導入部として読む必要がある。とはいえ、われわれ日本人の読者にとっては裨益するところがすくなくない。われわれもまた、基本的には英語圏の読者と同様な事情にあるからである。

本特集は (一)J. ルテーヴ「国立図書館」、(二)D. パリエ「大学図書館」、(三)N. リヒテル「公共図書館」、(四)J. アッサンフォルデ「学校図書館、リソース・センターの展開、1945年以降」、(五)M. ムロー「科学技術ドキュメンテーション」(六)M. ショウヴァンク「図書館の機械化」、(七)A. レリティエ及びJ. セッケル「図書館資料の概説」、(八)M. メルラン「図書館員及びドキュメンタリストの教育」、(九)M. ヴァニェ=ウルバン「専門文献の書誌ノート」の9つの論文から構成されている。ここではすべてを紹介することはできないので、いくつかを取り上げ簡単に紹介することにしたい。

(一) J.ルテーヴ「国立図書館」(以下文中ではBNと略示する)が巻頭に置かれているが、その所以はなんと言ってもフランス図書館界にあってBNの存在が極めて大きいからである。歴史と現状、組織・機構、納本と「フランス書誌」、受入と寄贈、目録と利用、保存の問題、各資料形態別の各部局の概要など、万遍なくBNの全体が取り上げられているが、現状のアウトラインの紹介が主眼であり、めぼしい内容は少ない。それでも近年の種々のセンターの地方分散化や利用規制、深刻な保存の問題などの問題点、また職員数、予算額、利用者数などの新しい数値データなどを知ることができる。本年1月30日付で朝日新聞紙上で報じられているようなBNの危機の深刻さは、ここでは影をおとしているようにはみえない。僅かに、この図書館の機械化の遅れに言及しているものの(BNの機械化の現状は(六)でもふれられている)、それも1985年完成予定の新館とあいまって、新しく軌道に乗るとの見通しが語られている。

(七)A. レリティエ及びJ. セッケル「図書館資料の概説」は、フランスの図書館がどのような蔵書を持ち(蔵書構成史も含む)、またそれらの蔵書を探索するにはどのようなツールがあるかをBN、公共図書館、大学図書館等につき丹念に記述していて有益である。この論文もBNの資料の解説から始めているので、論文(一)の補足ともなっている。BNのところでは各部局毎に出版目録を記述しているが、一般的なものとは別として特殊文庫の目録などに示唆されるところが多い。これらはBNの持つ蔵書の奥深さを教えてくれる。読者はBNから出している販売目録を参照しながら読むと便利であろう。

フランスの公共図書館はフランス大革命に端を発する没収図書 of 収蔵という歴史的起源からしても、19世紀以来の学者や愛書家達の寄贈で蔵書構成をしてきた歴史からも、学術公共図書館という特殊な性格を担ってきた。これらの地方の公共図書館の蔵

書内容を知るのは困難である。写本に関しては幸い「フランス公共図書館総目録」があるが、古書は、1974年BNに設けられた古書・貴重書センター（今日では残念ながら活動していない）の1975—77の調査では1800年以前の所謂古書がフランス全土に約1千万点近くあり、その内約370万点が238の市（町村）立図書館に分散されているとの事であるが、これらの内容は、二・三の例外を除き殆どその内容を知ることができない。一般図書では19世紀にはブリュネの分類体系に基く目録が出されているが、20世紀以降は目録の出版が大幅に遅れていると言っている。

大学、高等教育・研究機関図書館は雑誌や外国図書の蔵書に特色がある。北米の総合目録(NUC)のようなものがフランスにはないが、外国図書に関しては「外国図書総合目録」がBNにカード型式である。多くを一々紹介できないが、この論文からはフランスの重要な総覧、目録、書誌の存在と概要を知ることができる。

(三)N. リヒテル「公共図書館」は、本誌特集号の中で最も出色の力作である。著者は「フランス図書館報知」(BBF)で近年精力的に民衆図書館の歴史研究を発表し続けていて邦訳も二・三ある。この論文では公共図書館の活動総体を指すフランス独特の公読書の概念を前半部であとづけ、後半部では今日の公共図書館を概観している。前半部で著者は19世紀末から20世紀初頭にかけての時期を公読書の展開期、現代の図書館運動への転換期と位置づけ、公読書概念に至までの歴史と展開期の歴史を素描している。少し詳しく紹介しよう。

著者は先ず、公読書概念に至る大きなながれを4つにまとめている。(1)18世紀後期に現れた啓蒙主義思想を背景にした博愛的、慈善的な民衆読書活動。この活動は上層階級による民衆の教化政策であり、革命後も基本的視点は変わっていない。小説類の読書は禁止され、良書の読書を目的とする。(2)市（町村）立図書館の国民文化遺産の保存活動。一般大衆、労働者を排除する傾向にある。(3)ブルジョアジーの読書活動。小市民までの広がりを持つが、一般大衆にまでは手が届かない。舞台は貸本屋が中心、読書素材は小説類が中心。(4)労働者自身の読書運動。労働者階級のエリートが奨める自己教育運動。1848年の二月革命でたかまり、1864年の第一インターで確認されるが、労働組合に実際に図書館が生まれるのは1884年以後である。

以上の4つの流れの相互の、また微視的な動きのなかで公読書の概念の芽生えを見ようとするのが著者の立場である。この4つの流れの中で形成されてきた(1)学術公共図書館、(2)慈善的な労働者図書館、(3)学校図書館(1862年以降)、(4)労働者自身の図書館、(5)中流階級のブルジョアの図書館という枠組みは19世紀末、産

業革命を経過した社会構造に適應できず破産する。知的枠組みの変容と大衆の登場は歴史的転換期となる。オトレやラフォンテーヌのドキュメンテーションの提唱は前者に呼応し、ウジェーヌ・モレルの図書館の内部批判は後者に対応する。モレルに代表される英米系の公共図書館理念の導入は第一次大戦後アメリカ人のフランス図書館への援助によって、特にアメリカ人の図書館員教育を通して実際に拡がっていく。公読書概念は民間レベルから次第に政府レベルと浸透し、第二次大戦後政府による強力な公読書運動が展開される。著者の歴史的素描をさらに要約するとこのようになる。

著者リヒテルは歴史的素描に続いて、今日の公共図書館の姿を描いているが、この場合1968年の春の危機、所謂五月革命を起点にして捉えているが、これは卓見である。五月革命は現代社会の特徴である大衆社会とそれまでの知的制度との乖離を象徴する事件であった。歴史的転換点をしての意味は予想以上に大きいと、筆者には思えるからである。リヒテルは今日の公共図書館を(1) 国の公的施設、(2) 地方公共団体の公的施設(貸出中央図書館も、この枠組みでかんがえられているが、国の主導で始まったこの図書館活動も、現在は地方公共団体の移管が計画中である)、(3) 私立の図書館システム(カトリック界主導の労働者図書館の動き)、(4) 企業図書館、の4つの枠組みで考察している。

(8)M.メルラン「図書館員及びドキュメンタリストの教育」では、まず図書館の専門教育はただ単に最近の技法の修得だけにあるのではなく、専門職業にどのような社会的需要があるかとの問いに対する社会の解答でもあるのだと述べている。実際、フランスの図書館学校教育は本格的には国立高等図書館学校(ENSB)の1963/64年の開学から始まるのであり、20余年の歴史を持っているにすぎない。他国に比べ遅れた原因としてメルランは、(1) 大学教育の在りかた、(2) 図書館側の需要の二点を挙げている。確かに、1821年創設の古文書学校は多くの優秀な図書館員を生み出してはきたが、もともと文書や古書に精通する専門家養成の場であり、図書館職員の養成・訓練の場ではない。図書館の現実が、今日的な職業教育を必要としてこなかったのである。1879年、図書館員の資格制度がまず大学図書館で現れ、次いで1897/98年に市(町村)立図書館に拡大される。しかし、学校そのものはこの頃まだない。専門教育の胎動は20世紀に入ってからであり、1935年フランス図書館員協会の会長G.アンリオがパリのカトリック学院に創設したのが最初の正規の学校である。国レベルで本格的な図書館学教育が考えられるのは、第二次大戦後になってからである。

本論文は1950年以降の職業教育の現状の紹介が中心であり、政府レベルでのENSBの専門職員教育と技術職員教育、地方の地域センターでの図書館員資格適格証(CAFB)教

育、専門図書館やドキュメン・センターのドキュメンタリストの教育について論じ、さらに教育内容、教育期間等も論じている。

最後に(九)M. ヴァニエ=ウルバン「専門文献の書誌ノート」は、フランス図書館界のすでに廃刊となった過去の雑誌をも含め、主要な雑誌を解題し、単行書の一覧リストも挙げている。

(二) 大学図書館論、(四) 学校図書館論、(五) ドキュメン・センター論、(六) 図書館の機械化論は、ここでは取り上げなかった。(四)～(六)は筆者に予備知識がないからであり、(二)は独立して取り上げられてよい論題だと思われたからである。全体として粗い紹介に終わったが、読者は本特集号を導入部とし、さらに脚注等の文献を読み進まれるなら、フランスの図書館理解は一層確実なものとなるであろう。

(受理 昭和59年9月15日)

* ニュース・レターに掲載する図書館史についての短い原稿を募集しています

内容

1. 単行書の書評
2. 資料紹介
3. 海外文献の紹介や論評
4. 論文の紹介や論評 など

投稿規定

1. 枚数 横書き原稿用紙12枚以内
2. 送付先 福山女学園大学(事務局)
3. 原則として、送付された原稿は、次回のニュース・レターに掲載する。

* 『図書館史研究』(第二号、昭和60年夏刊行予定)の原稿を募集します。

- A. 欧米の図書館史に関する論文
- B. 400字づめ原稿用紙(横書き)30枚から40枚
- C. 提出期限 昭和60年3月末日
- D. 送付先

図書館情報大学内 寺田光孝

ふるって力作をお寄せ下さい

*第9回運営委員会報告

第9回運営委員会は、10月7日（日）午後5時から、廬山菜館（東京 神田）にて開催。来年度の図書館史セミナー、『図書館史研究』（第二号）の編集方針、さらに今年度のセミナーの総括などを中心に検討した。なお、60年度セミナーについては、開催地を東京に決定した。出席は、天満隆之輔、岩猿敏生、阪田蓉子、小川徹、中林隆明、常盤繁、河井弘志、工藤一郎、石井敦、寺田光孝、川崎良孝。
次回の運営委員会は、12月2日（日）東京にて開催する。

*事務局より

新入会員

9月におこなわれたセミナーのテープを御希望の方は、事務局まで御連絡下さい。

（文責 川崎良孝）